

平成 30 年度高知県食の安全・安心推進審議会 分科会報告

「環境保全型農業の最新情報」

日時：平成 31 年 1 月 8 日（火）15:00～16:20

場所：高知会館 4 階 やまもも

参加者：委員 5 名（久委員（座長）、中澤委員、大久保委員、能勢委員、田村委員）

幹事課：環境農業推進課（下元チーフ）

参加関係課：食品・衛生課、漁業振興課、高知市生活食品課

話題提供

化学合成農薬の使用を減らし、周辺環境への影響に配慮した環境保全型農業への取組について話題提供。

天敵昆虫の導入がすすみ、県内の施設ナス、ピーマンでは技術がほぼ確立していること、また、新たな土着天敵の発見と導入について紹介があった。病害対策では、微生物製剤や湿度制御、紫外線（UV-B）、弱毒ウイルスなど、様々な新しい技術研究がすすんでいるとの情報提供があった。

主な質疑応答及び意見交換

- ・以前は高価な導入天敵を主体に使っていたが、今は土着天敵も使っている。
- ・ H25 頃からピーマンへの導入率が高まったがなぜか。
 - この頃からスワルスキーカブリダニの利用技術が安定した。また、タバコカスミカメの利用も進んできた。
- ・キュウリには何を使っているのか。
 - タバコカスミカメ、スワルスキーカブリダニを使っているが、虫媒ウイルス病の発生もあり利用がなかなか進まない。他の方法を含めて対策をすすめている。
- ・天敵をハウスで使っているので、興味がある方は実際に見にくると良い（能勢委員）。
- ・偶然に虫（土着天敵）を見つけた方はすごいと思った。
- ・害虫を食べてくれるハエの話は驚いた。
 - 土着天敵の研究はこれまでも行われてきたが、全国的にみても、研究者数は少なく、分野も狭かった。それが生産者も含め多くの眼で観察することで、こんなに色々なことが分かり、利用が広がってきた。
- ・土着天敵の利用は、「この虫がいると作物が元気に育ってる」という気づきから。
 - クロヒョウタンカスミカメの時も、最初は「何かを食べているみたい」としか思われていなかった。しかし、現場での観察、県と大学との連携による研究から、害虫に対する捕食性、発育期間などの生態等が明らかになった。
- ・天敵だけでどのくらい農薬が減らせるのか。
- ・自分（能勢委員）のところは農薬の使用は年 3 回くらい。ポイント、ポイントで農薬をまくと後は天敵がやってくれる。天敵には愛着がわいている。